

第6回 阿賀川自然再生モニタリング検討会 議事要旨

開催日時：令和5年1月25日（水）13:30～15:45

場 所：阿賀川河川事務所 1階会議室

【議事次第】

1. 開会
2. 事務所長あいさつ
3. 議事（1）
 - ・阿賀川上流域自然再生事業の経過報告及び中流域への展開について
4. 議事（2）
 - ・阿賀川自然再生計画書（案）の更新について
5. 閉会

【議事】

- （1）阿賀川上流域自然再生事業の経過報告及び中流域への展開について
 - ・ 上流域 26-27k 区間は、狙い通り網状の砂州が形成されているようにみえるが、平水位で水が流れているのか。
 - ・ 融雪出水の影響が少なくなっている令和4年4月の航空写真から、水が流れている状況である。
 - ・ 特にこの区間が上手くいっていると考えてよいか。
 - ・ 令和元年から3年にかけて大規模な伐採事業があったと説明があったが、高田橋から蟹川橋まで堤防上を歩くと見通しが良くなった。本郷の方も良くなった。事業の実感がある。
 - ・ （事務局）現時点では、事業の効果は出ていると思われる。
 - ・ イトヨ調査の令和2年度と令和4年度の結果について、左右岸で生息状況に違いがあるようだが、生息環境に何か違いがあるのか。
 - ・ （事務局）イトヨの生息場はワンド等の消長の中で維持されていくものと考えているが、左岸は長年維持されているワンドが存在していることが左右岸で生息状況に違いがある特徴の一つであると考えている。
 - ・ 右岸側のイトヨ生息環境の状況について教えていただきたい。
 - ・ （事務局）令和2年度以降、大きな出水がないことから、生息場に影響している可能性があると思う。このため、洪水によってフラッシュされやすい環境も必要であると考えている。
 - ・ 今回の調査は、イトヨの幼体が生息できるような湧水ワンドに特化したものと

思う。イトヨは旧河道由来の支流や細流などにもおり、遊泳能力は意外に大きい。過去には右岸側にもたくさん見られた。例えば高速道の直下あたりは多く生息していたが、近年はガマが繁茂しアオサギのコロニーが付近に形成されるなど環境が変化し少なくなった。左岸に多いのは、比較的（攪乱されにくく）落ち着いているからではないか。

- p.7の礫河原、樹木、草地面積の推移グラフは、従来の土木的な事業効果のまとめ方であるが、阿賀川上流域の事業の評価されるべき点は、事業によって変化した河道環境に応じて、魚類や植物がどのように応答してきたかといったところまで明確にしているところである。また、流量や水位といった指標と魚類や植物の関係についても明らかになってきたこともこの事業の評価すべきところである。大変よくまとめていただいたと思う。ただし、魚類と植物だけでなく、各委員の専門分野が多岐に渡ることもあり、他の生物についてはどうか、様々な視点からご意見いただくことが重要と思う。
- 堤防から河川を眺めると、河原が広がっていると実感がある。上流域モニタリングでは、チドリ類の調査がされており、河原拡大によりチドリ類やセキレイ類は間違いなく繁殖場が広がったのだと思う。礫河原の指標種の調査としては妥当だったと思う。ただ、生物多様性の観点からは、河原や河原指標種だけでなく、他の環境や動植物についても調査・保全してもらいたいと思っている。
- 昆虫については、カワラバッタを指標種として調査いただいたが、指標種としては良いと思う。一般的に礫河原に環境が変化すれば、みられる昆虫類の種や個体数は減少すると思う。ヤナギ林の方が多様性は高い。塩川出張所に過去に作成された昆虫標本が保管されているが、様々な種がみられる。礫河原だけでなく広く阿賀川で見られる環境を念頭においてもらいたい。
- （事務局）河川水辺の国勢調査業務において、自然再生事業工区（飯寺）に新たに調査地区を設定しており、数年に一度のペースでモニタリングを継続する。河川水辺の国勢調査では、礫河原だけでなく調査地区内の様々な環境、種を対象に調査を実施する予定である。今後事業予定の中流域においても、調査地区の設定が必要であれば検討し、中長期的な視点で他の環境や動植物についてモニタリングを実施していきたい。
- なぜカワラハハコを指標種として選定したか、ということを改めて考えてみると、元々の阿賀川の礫河原にあったものかは誰にもわからない。しかし、過去から伝え聞いた中で、昔はもっと礫河原が広がっていたと誰もが言うので礫河原が広がっていたのは間違いないだろう。今のように堤防に囲まれていないので、洪水があれば一気に裸地が広がり、最初は河原を好む種が進入してくるだろう。この最初に進入してくる種が大変重要で、これを保全することで様々な種が徐々に入り込んで、置き換わってを繰り返し豊かな生態系が形成される。本資料はカワ

ラハハコに特化した資料となっているが、阿賀川の生態系の基礎を担う重要な種である点から、それで大変良いと思う。こういった基礎となるものを事業によって絶えず提供することは最大の住民サービスとなるだろう。カワラハハコは全国各地に生育するが、阿賀川のような大群落のある河川はほとんどない。阿賀川らしさを示している。

- ・ 礫河原指標種だけ着目すればいいのだろうか。近年阿賀川において外来種の分布拡大が著しい。オオカワヂシャは阿賀川のかかなり上流ではあるが荒海地区にも出てきている。下郷町の養鱒公園の水路ではオオカワヂシャの繁茂によりこれまでみられたバイカモの群落がなくなった。魚類ではフクドジョウやブラックバス、両生類ではウシガエルが挙げられる。1/7 には湯川村にアライグマが出現したと報告があった。こういったものも注意して見ていかなければならない。魚類ではカジカ、アカザも減った印象がある。昆虫では蟹川橋付近の堤防のヒメシロチョウ、食草のツルフジバカマの生育箇所をロープで囲って保全しているようだが、毎年生育位置は変化するものである。毎年毎年チェックして、新しい情報を入れながら絶えず変化に対して柔軟に対応していく必要がある。
- ・ これまでの議論から、上流域の事業については評価できるものということなのだと思う。中流域への展開に関しての議論もあったことから、p.27 に記載されている、中流域事業方針について議論をしていきたいと思うが、意見のある方はどうぞ。
- ・ 中流域でも上流域同様に $240\text{m}^3/\text{s}$ と考えているとのことだが、中流域と上流域では粒径が異なり、中流域の方が細かく溜まりやすい河道の特性だと思う。上流域は上手くいったら中流域ではどうか。 $240\text{m}^3/\text{s}$ の設定根拠は何であるか。磐越自動車道から上流の右岸側は泥の堆積が目立つ。少し前までは本川の水際はきれいな礫であった。もっと大きな出水でなければ泥は流されず、礫河原再生されないのではないか。むしろ無理に礫河原を創出していくのではなく、礫河原になりそうなところを絞ってもよいのではないか。その方が多様な環境があり多様性にも寄与する。今後の事業予定はどうなっているのか。
- ・ (事務局) 事業化の手続きはこれからのため、具体的な予定は現時点で未定である。設定した流量については、礫河原再生だけでなく水衝部対策という面もあり、ヤナギ類の生育位置と冠水頻度の重ね合わせ図を説明させていただいたが、樹林化の原因となるヤナギ類に対してはやはり $240\text{m}^3/\text{s}$ で考えていきたい。また事業の範囲については、全体的に掘削や伐採をするのではなく、一部二極化が進行している箇所もあり、そういったところを重点的に実施していくことを現時点では考えている。
- ・ p.27 に関連して、所属する団体で会津の外来植物調査を実施した。どんな種が生育しているか把握できたが、どのくらい生育しているか把握することは困難で

あった。参考指標値にある植物群落面積はどのように把握されるのか。

- ・（事務局）河川水辺の国勢調査業務の環境基図において植生図を作成するので、その成果を活用する。
- ・ 多様な水域環境が目標に入っているが、どうやって実現していくのか。参考指標値に上手く反映できないか。事務局で検討してもらいたい。
- ・（事務局）瀬、淵等の多様な水域環境にも着目し、検討していく。
- ・ 外来植物面積を減らしていくことには賛成であるが、礫河原増大に伴い、オオキンケイギクも大繁茂するのではないか。実際、礫河原が広がった高田橋上下流の砂州には大繁茂が見られている。
- ・（事務局）特定外来種については、維持管理での対応が基本と考えているが、駆除など直接的な対策も必要と考えている。
- ・ 目標に「保全・再生」とあるが、そのための予算が確保され事業を実施する運びとなっているのか。
- ・（事務局）事業化の手続きが完了し、それから予算を要求する流れとなる。事業化に向けては今回の検討会も含め各位委員から出された意見を反映していきたいと考えている。

（２）阿賀川自然再生計画書（案）の更新について

- ・ モニタリング計画案が記載されているが、評価指標はこれでいくのか。
- ・（事務局）礫河原の評価は資料の通りであるが、これまでいただいた意見にもある多様性のある水環境という観点も盛り込んでいきたい。
- ・ 両生類、は虫類、ほ乳類もそうだが、一般鳥類は含めないのか。阿賀川には礫河原以外の環境がたくさんある。考慮してもらいたい。
- ・（事務局）河川水辺の国勢調査では、各分類群において網羅的に調査を実施しており、基本的にそちらで対応していく。鳥類についても直轄区間全川で調査を実施している。
- ・ 植物の調査時期について、例えばオオカワヂシャは秋には確認しにくくなる。調査時期については年１回出なく柔軟に対応してもらいたい。
- ・（事務局）調査工程案で４～１０月に対応することとしており、この期間で柔軟に対応していきたい。
- ・ 計画書案の要約とのことであるが、こういった扱いの資料であるか。
- ・（事務局）本資料は現時点版の計画書からの更新箇所を要約したものである。この内容を計画書に反映した変更（案）は来春に上部に上げていく予定となっているが、それまでには委員の皆様にも共有させていただきたい。その際にもご意見あれば頂戴したい。